

述の動向と課題—都道府県文書館の目録と検索システムの状況から—

柴田知彰「アーカイブズの内的秩序構成理論と構造分析の課題」

森本祥子「アーカイブズ編成・記述の原則再考—シリーズ・システムの理解から—」

第二編 アーカイブズの構造認識と

編成記述論

渡辺浩一「日本近世・近代在地記録史料群の階層構造分析方法について」

西村慎太郎「商家文書の史料群構造分析—松代八田家文書を事例に—」

工藤航平「名主家文書における文書認識と目録編成—分散管理と情報共有の視点から—」

加藤聖文「近現代個人文書の特性と編成記述—可変的なシリーズ設定のあり方—」

清水善仁「組織体の機能構造とアーカイブズ編成—大学アーカイブズを中心に—」

第三編 近世の記録管理とアーカイブズ

大友一雄「転封にみる領知支配と記録—編成記述のための歴史学的アプローチの可能性—」

西向宏介「近世の商家と記録管理」

山崎一郎「萩藩士家における「御判物・御証文」の保存と管理」

東昇「近世石清水八幡宮の神人文書と文書認識—分散管理と情報共有の視点から—」

青木睦「近世アーカイブズの紙質調査と組織体の料紙」

アーカイブズの構造認識と編成記述

国文学研究資料館／編
思文閣出版

2014／3 391p 22cm 6,700円（税別）
ISBN：978-4-7842-1736-6

本書は、これまで日本のアーカイブズ学の研究・教育をリードしてきた国文学研究資料館が、3年間の共同研究に基づき編集した論文集である。その構成は以下の通りだが、アーカイブズ編成記述の理論的考察から具体的な近世文書群の構造分析まで、多岐にわたる内容が収録されている。

第一編 アーカイブズの編成記述

—理論と動向

太田富康「アーカイブズ機関における編成記

第一編ではアーカイブズ編成記述の理論的枠組みが整理される。まず太田論文では、都道府県立の文書館等を対象としてアーカイブズ編成記述の動向を示す。古文書・私文書の目録等の現状を行政文書の場合と比較するとともに、近世アーカイブズの構造分析の成果を生かしつつ、目録の「わかりやすさ」「使いやすさ」を考慮した編成記述のあり方について考察している。

アーカイブズ編成論の中核にあるべき理論

体系を、数学や物理学の知見を踏まえて提示するのが柴田論文である。個体・団体の組織構造とそれらが果たす諸機能の関係を、秀逸な比喻や論理的な数式を用いて表現する。これらの機能がどの程度文書化され保存されるかも加味しながら、多様な史料群の特徴を踏まえた編成作業の方法論についても論究している。

日本でも近年注目されつつある「シリーズ・システム」の意義を考察したのが森本論文である。この考え方がオーストラリアで提唱された経緯を概説し、日本の公文書を対象とした適用例を示す。出所原則の否定と誤解されがちな同システムについて、むしろ出所原則を真の意味で守りつつ、現代記録をめぐる課題への対応を図るためのものであると指摘する。

第二編は編成記述と構造分析の事例研究である。まず渡辺論文は、渡辺氏自身がかつて作成した目録における階層構造の批判的検討を通じて、1980年代以降の編成記述論の展開過程を考察する。組織重視から機能重視へと表現できるこの間の動向を踏まえた上で、日本の記録史料群の多様な形成パターンを挙げながら、階層構造分析の方法論について検討を加えている。

西村論文は、商家文書を対象とした階層構造分析のプロセスを報告するとともに、そのあり方を検討したものである。国文学研究資料館等におけるこれまでの成果を踏まえつつ、階層構造の発見のために、人物の役職や肩書、「家」「店」の機能、文書の残された秩序に注目するという具体的方法論を提示する。

工藤論文は、近世の村方文書のうち名主家文書の目録編成を検討する。従来の編成は家を単位としていたが、重層的な広域行政を行った組合村の文書と村政文書が混在する実態や、組合文書の分散的な管理状況、借出・書写された二次史料の存在等に留意する必要があることを指摘している。

他の章が組織体の文書群を検討対象とする

のに対し、加藤論文は、近現代の個人文書に関する編成を論じている。複数の役職を歴任した個人の文書群は、当該個人の社会的経歴を軸にしたシリーズ設定が合理的とする。諸外国の個人文書の編成事例を参照しつつ、利用者への迅速かつ効率的な情報提供を重視した実用的な編成記述の必要性が強調される。

清水論文は、従来の組織別編成は親機関の頻繁な組織改編への対応が困難であったという観点から、その克服のための方法論として、組織が果たす機能を軸とした編成について論究する。その際、現用段階における文書分類表の活用を提案し、国立大学を例にその可能性と課題を検討している。

第三編では、近世における記録の管理や認識について、記録作成母体の類型ごとの分析がなされる。まず大名文書について、大友論文は近世大名の領知支配の移転という特殊状況下における文書の引き継ぎと支配記録の作成を論じる。延享4年(1747)の転封手続きでは、各藩の土地に関する情報が統一的な様式で記録されて幕府に提出された。その際に引き渡された記録と引き渡されなかった記録につき、各々の性質や史料群としての構造・伝来を検討する。

次に商家文書について、西向論文は近世商家文書の中核を占める商業文書(取引証文や帳簿など)を対象に、商家の特質とその記録管理との関係を考察する。芸備地方における商家の事例とともに、近世商家の家訓・規則類や商事慣例等の編纂物から商業文書の作成、保存年限、廃棄等に関する条項を分析し、その全国的傾向を明らかにしている。

藩士文書について、山崎論文は萩藩士家の文書群の中の「御判物」「御証文」に注目する。これらは家の由緒や権利を保障する存在であり、他の文書とは区別して保存・管理された。こういった重要文書が、家の断絶、家臣の系図・由緒調査、藩祖の年忌法要などの際にどう管理・利用され、その価値がどう意識されていたかを考察している。

石清水八幡宮の神事に参加する「神人」の

身分のあり方とその史料群構造の関係を検討したのが東論文である。神人身分を証明する文書には、神人の家間を移動し、それに伴って身分も変化するという特徴があった。近世における朱印状・補任状を対象に、その発給数の変容や管理のための定書や届、譲渡や相続の手続きなどが分析される。

アーカイブズ資料に用いられる紙（料紙）は、文書の発給者・使用者の身分や格式によって使い分けられることから、保存・修復のためだけでなく、その発生と機能を解明する目的でも調査がなされてきた。青木論文は、近世アーカイブズ資料の紙質調査で用いられる測定方法を整理した上で、近世料紙の種類・呼称・形状等の事例と類型について概説している。

本書全体を通じて見出せる顕著な特徴の一つは、外国のアーカイブズ編成記述の諸理論を金科玉条ととらえるのではなく、具体的な資料群と向き合った実践経験に引きつけて考える姿勢である。このような試みは従来もあったが、本書は機能別編成などの新たな動向もとり入れつつ、その実践のための方法が具体例に即して提示された点に価値がある。その意味で、現時点における日本のアーカイブズ学研究の到達点を示す成果といっても過言ではないだろう。本書の率直かつ積極的な議論が触媒となり、研究と実践のさらなる深化を期待したい。

京都大学大学文書館 坂口貴弘